第３回岩手県総合計画審議会　若者・女性部会

（開催日時）令和８年５月 27 日（水）10：00～12：00
（オンライン開催）

１　開会
２　議事
（１）意見交換（テーマ：希望が実現できる社会について）
３　その他
４　閉会

出席委員
牛崎志緒部会長、佐藤柊平副部会長、西條匡杜委員、山影峻矢委員、山屋理恵委員
吉田知世委員
欠席委員
櫻井陽委員、藤瑠杏委員

１　開会

○菊池政策企画課特命参事兼政策課長　御案内しておりました 10 時となりましたので、ただいまから岩手県総合計画審議会第３回若者・女性部会を開会いたします。私、前回に引き続きまして、しばし進行役を務めさせていただきます菊池です。改めまして、よろしくお願いいたします。

まず、本日の審議会の開催に当たりまして、委員の出席状況でございますが、委員８名のうち６名御出席いただいております。委員の半数を超えておりますので、会議が成立していることを御報告いたします。

それでは、初めに中里企画理事から御挨拶申し上げます。

○中里企画理事　皆さん、おはようございます。

本日も皆様お忙しいところかと思いますが、第３回若者・女性部会に御出席いただきまして、誠にありがとうございます。

前回第２回の部会では、「一人ひとりの希望の実現」をテーマにして多くの御意見をいただいたところです。例えば希望を持ちながらも様々な要因があって、その実現に至っていない実態ですとか、希望を後押しする上で、例えば挑戦できることと失敗しても大丈夫といった、いわゆる可能性と安心の両方が重要であるというような意見があったと考えております。

今日は、第３回ということで「希望が実現できる社会」をテーマとして、個人の希望を後押しするための社会の在り方について、さらに一歩踏み込んだ御議論をいただければと考えております。

今日も皆様の実感ですとか、御経験を踏まえた意見交換をしていただければありがたいと考えておりますので、本日もどうぞよろしくお願いいたします。

○菊池政策企画課特命参事兼政策課長　次に、本日の審議の概要、進め方等について、事務局より御説明いたします。

○五十公野政策企画課主任　政策企画課の五十公野でございます。いつもありがとうございます。私の方から部会の進め方などについて御説明いたします。

資料は４ページを御覧ください。本部会の設置の目的、委員の構成につきましてはこれまで同様でございますので、記載のとおりとなります。

今後の予定でございますけれども、本日は第３回として「希望が実現できる社会」をテーマとしております。また、本日の議論やこれまでの御意見などを踏まえ、次回の取りまとめにつなげていきたいと考えております。

続いて、５ページをお願いいたします。本日の審議の進め方ですけれども、議事としましては本日のテーマに沿った意見交換となりますが、意見交換の前に事務局より前回の議論の振り返りや今回の議論の視点などについて御説明させていただきます。

本日の進め方などについての説明は以上となります。

２　議事

（１）意見交換（テーマ：希望が実現できる社会について）

○菊池政策企画課特命参事兼政策課長　それでは、早速ではございますが、議事の方に入らせていただきたいと思います。

それでは、以降の進行につきましては、牛崎部会長よろしくお願いいたします。

○牛崎志緒部会長　ありがとうございます。皆さん、おはようございます。本日もどうぞよろしくお願いいたします。

では、早速ですが、議事の意見交換に入っていきます。それでは、先に事務局から資料の御説明をいただいてもよろしいでしょうか。

○五十公野政策企画課主任　それでは、意見交換に入ります前に前回の議論の振り返りや今回の議論の視点などについて説明いたしますので、８ページを御覧ください。

まず、前回第２回の振り返りをさせていただきます。前回は「一人ひとりの希望の実現」をテーマに希望の後押し、つながりの拡大、変化に適応するアプローチという点を中心に様々御意見を頂いたところです。また、希望を後押しするには、例えばですけれども、やりたいことに挑戦できるといった可能性の拡大という側面、前回は攻めという表現も出てきましたが、そういった側面が充実していることが重要であるという一方で、やりたいことができるためには失敗しても大丈夫というような安心という側面、前回は守りという表現もありましたが、この両方が実現していることが必要という意見がございました。こうした視点で希望の後押しに関する前回の意見を整理したものがこちらになります。

まず、「可能性の拡大」に関する部分ですけれども、前回の議論では「やりたい仕事がない」という認識が流出要因になっていることから、逆に「岩手でもできる」と思えれば、岩手が選択肢として残っていくということや、高校、大学段階での外部との接点が進路選

択に影響しているなどといった意見が挙げられました。

次に、「安心」の観点では、奨学金や低賃金などにより、将来不安によってやりたいことよりも「失敗しない選択」が優先されてしまい、希望はあるけれども、行動できないというマインドが働いてしまっているということや、一度失敗すると立て直しがなかなか難しいという意識が挑戦そのものを抑制してしまっているなどといった御意見がありました。

続いて、９ページを御覧ください。「つながりの拡大」に関する御意見です。ここでは、主に情報や接点の不足が課題として挙げられました。主なものとしては、就職活動において地域企業の情報が届きにくいという点、また自発的に探しに行かないと情報が得られないために、岩手の情報を知らないまま選択肢から外れている状態はもったいないといったことのほか、定住だけに限らない、関係人口などの多様な関わり方が見られる地域であってほしいというような御意見がございました。

続いて、10 ページを御覧ください。「変化に適応するアプローチ」に関する御意見です。ここでは、主に社会構造や価値観の変化がポイントとして挙げられています。主なものとしては、若者の意識は県外に出ることが自然となっており、戻ることや定住を前提とすると違和感が生じてしまうという点や、都市は楽しいというよりも「生きやすい」から選ばれているというような御意見がありました。この都市の方が「生きやすい」という部分の背景には、地域に根強くある地域の過度な干渉であったり、ジェンダーギャップや役割意識などが存在しており、これが戻りにくさであったり希望の制約につながっているというような御意見でございました。

続いて、11 ページを御覧ください。今回の議論の視点でございますけれども、一番下の部分になりますが、これまでの議論を踏まえ、希望を後押しするために２つの側面、可能性、安心から「どのような社会であれば希望を後押しできるか」という視点を中心に議論を進めていただきたいと思っております。なお、議論に当たりましては、これまでの意見の全体を整理するとこういうイメージとして捉えられるであろうというものを別紙１として図に整理しましたので、続いて 12 ページを御覧ください。

こちら「希望の後押し」に関する全体イメージとなります。意見にもありましたとおり、希望の後押しには、特にも「つながりの拡大」や「変化に適応」という重要な要素があり、そして、その希望を後押しするには可能性の拡大と安心の２つの側面、これがどちらも充実していることが重要であるというような捉え方をしております。そして、その「希望の後押し」が希望の実現につながり、それがひいては岩手が若者・女性に選ばれることにつながるというような構成となっております。吹き出しの内容については、これまでの御意見を参考に一例として記載しているものでありまして、①が背景、②が背景を踏まえたそれぞれの希望、③がその希望を後押しするための社会の取組、④が希望の実現というような流れとしております。この全体イメージについては、それぞれの御意見が全体として見るとどういった観点からの御意見なのかということを把握しやすいように準備させていただいたものですので、御参考いただければと思っております。

本日は前段で御説明したとおり、２つの側面、可能性の拡大、安心という観点からどのような社会であれば希望を後押しできるかという視点でこれまでの議論になかった観点や、より深めていきたいポイントなどがありましたら、ぜひ御意見を頂戴したいと思っております。

以上で事務局からの説明を終わります。本日はどうぞよろしくお願いいたします。

○牛崎志緒部会長　ありがとうございます。

では、一旦ここまでで事務局からの御説明に関して御質問がありましたら皆様から頂戴したいと思います。挙手ボタンを押していただくか、画面上で手を挙げていただければと思いますが、いかがでしょうか。大丈夫ですか。

（異議なし）

○牛崎志緒部会長　ありがとうございます。

前回議論を皆さんとする中で、ゴールってどこだっけというのも皆さんから頂戴したと認識しています。事務局の方でまとめていただいたところかと思います。

本日が第３回で、第４回にまとめ、６月 18 日にまとめというところを御用意いただいておりましたので、まだまだここは皆さんからどんどんアイデアですとか御意見をいただく場として認識しております。ですので、どんどん拡散もありと私は思っておりましたので、ぜひ皆さんからいろんな認識、お考え、ちょっとこれ変だなと思うことなどお寄せいただく場と思っておりますので、今日もどうぞよろしくお願いします。前回も私はすごく楽しくて、いろんな御意見に触れることができて、こういったまとめのペーパーにも事務局に起こしていただいたところ、大変ありがとうございました。

では、御質問がないというところで、早速ですが、続いて意見交換に入る前に、前回と同様委員の皆様からお一人ずつ前回の御意見の振り返りですとか、今事務局からもお話しいただきましたが、県から説明があった内容等についてお考えをお話しいただきたいと思います。

では、また名簿順に、西條さんは今日は出ていただいていて、西條さん、前回資料つくっていただいてありがとうございました。皆さんとも共有しまして、ありがとうございます。さすがと思いながら、みんなで西條さんの御意見に触れることができました。

では、トップバッターの西條さんよろしいですか、お願いします。

○西條匡杜委員　かしこまりました。すみません、今日はちょっと忙しくて、資料つくれていないのですけれども、話すと前回は自分は就活生という観点から話させてもらっていて、今週になるに至って、どんどん就活が本格化してきているのですけれども、その中で自分はルーツというか、関係があるのが関東と東北だから、やっぱりその辺で働ける会社を探しているのですけれども、これってあくまで僕が言葉を選ばず言うと特殊というか、そうではない人の方が大学の友達と話していると多いのです。となったときに、僕は前回マイナビとかそういうところに岩手の人の岩手の会社のためのページをつくったらどうですかみたいな意見を出したと思うのですけれども、それって結局、目にとまってもこういう興味ある人じゃないと、やっぱりすごく大きな効果は生まないのかなと思っていて、それを自分の立場に置き換えたときに、西の方には自分は行きたくないという気持ちがどうしてもあって、悪い土地だからとかそういうことを言いたいのではなくて、やっぱりなじみがない土地だから、やっぱり行きたくないなとなったときに、例えばマイナビ見ていて、

九州のとある県の特集みたいなのがあったとしても、多分クリックしないじゃないですか。となったときに、それと同じことが特に地方だとどこでも起こりやすいのだろうなというのは実感があるというか、認識があるということを考えながら過ごしていたのですけれども。

では、何がいいのかなと思ったときに、結局事前に共有された資料で無関心層へのアプローチみたいな欄があったのですけれども、無関心層へのアプローチというのはどうしても向こうから来てくれないともう難しいのだろうなというのは正直感じていまして、それを自分は東北が好きだからアプローチしようと思うけれども、それって無関心層に対するアプローチではないと思うのですよね。だから、その中で関心がない人にどうやって接すればいいかというと、やっぱり仕事の転勤とかでどうしても来なくてはいけない人、言い方失礼なのですけれども、不本意ながら来てしまったみたいな人が多分いらっしゃると思うのですね。そういう人に岩手ってすごくいい場所だなと思ってもらえるような施策が無関心層を引きずり込むためには大事なのではないかなというのをちょっと自分は感じて、たまたまインスタグラムを見ていたらすごく面白い記事があって、それは岩手ではなくて別の県なのですけれども、そのページをさっき必死にパソコンで探していたのですけれども、見つからなくて、見つかったらチャットで共有しますが、その話は、東京から岡山に不本意ながら行かざるを得なくなってしまったという人の話だったのですけれども、ずっと住み続けている中で、どんどん岡山の良さに気づいていって、最終的には東京に戻るという選択肢をやめてまで岡山に残るということを決めたという話があって、それ見てすごくいいなと思ったのと、それを岩手でもやっていくことが無関心な層に対するアプローチとしては適切なのかなと思いました。

結論を述べさせていただくと、関心のある層へのアプローチは僕が前回言ったような意見、アイデアである程度は賄えるのかなと思うのですけれども、そうではない大多数の無関心の方、言い方を選ばずに言うと不本意ながら来てしまったという人たちに対するアプローチがどれだけ優れているのかというのを僕は岩手に住んでいなくて、県の政策も最近忙しくて全然見れていないので、言っていいのか分からないですけれども、来てしまった人たち、来てしまったという言い方になってしまう人たちをどう扱うかというのが今後は大事になってくるのではないかなと個人的には思っております。

ちょっとまとまっていないかもしれないですけれども、以上です。

○牛崎志緒部会長　ありがとうございます、西條さん。

では続いて、今日は櫻井さんお休みでしたので、佐藤柊平さんお願いします。

○佐藤柊平副部会長　皆さんいつもお世話になっています。一般社団法人いわて圏の佐藤です。

前回ちょっと岩手への思いがあふれ過ぎていろんな話をして議論を撹乱してしまったような気がするのですが、私の方から今の西條さんのお話も含めて、希望の後押しみたいな部分をどうしていくかということに関してちょっと思っていること２点ほどを共有させていただきますと、先にお話しする１点目としては、無関心層へのアプローチとか、潜在層をどう掘り起こしていくかみたいな部分をちょっと引き継いでいってお話しすると、どう

しても県でしたり自治体に限らず、いろんな施策というのはどうしても直近のＫＰＩとか、単年度の中でどういう事業効果が出てくるかみたいな部分を分かりやすく見える化していかなければいけないという使命というか、どうしてもそういった実情があると思うのですが、１点お伝えできたらいいかなと思っているのは、直近のＫＰＩにとらわれない、ちょっと遠回りかもしれない施策とか、５年から 10 年ぐらいの単位をかけてつくっていくみたいな部分が必要なのではないかなと思っています。

ちょっと画面共有で１つ事例を御紹介すると、兵庫県の豊岡市というところで、卒業する地域の高校生たちに向けて、豊岡市というのは「飛んでるローカル豊岡」というまちのコンセプトがあって、世界に飛び立っていくまちだみたいな、そういうコンセプトをつくっているのですけれども、高校の卒業式に併せて地域の人たちからのいろんな送り出しのメッセージを送るみたいなポスターの取組がコロナ前にあったのです。例えば高校生を送り迎えしていた、輸送していたバスの運転手さんから、例えば「３年間御乗車ありがとう。新しいまちに出発進行」みたいな、こういうポスターとか、あとは例えば森林組合の人たちとかが、「育った景色がいつの日かあなたの支えになりますように」みたいなコピーのポスターとかですね、こういうちょっと何かぐっと来ますねみたいな、結構あるのですよね、担任の先生と、こういう「ちゃんと食べなさい」とか。そうですね、いろんなメッセージのポスターを何種類だろう、多分 30 種類ぐらいつくってまちじゅうに貼り出すみたいなことをやったりしています。

これ 2017 年とか 2018 年とかなのですけれども、このポスターを見て心をつかまれるではないですけれども、ちゃんと心に刺さって、将来豊岡に帰ろうとか、市役所受けましたとか、こういう地元の会社にＵターンしてきたとか、そういうような話がたくさん出てきているというエピソードを伺ったりしています。

あとは、何を言いたいかというと、これって一応市の施策で、市の予算を使ってやっているのですが、「これやったからどうなるんですか」みたいなものというのは、やっぱりすぐにははかりにくいけれども、例えばこういったものが地元を離れるタイミングとかであって、少し心に残るエピソードというか、原体験になっていくと、将来の進路選択とか職業選択を考える上での結構価値観形成みたいなものにつながるかなとも思っています。

今回希望の後押しをどのようにしていくかといったときに、希望を育むみたいなところでいうと、そもそも自分が何したいのか分からないとか、どうしたいのかみたいなことを言語化できないままもやもやしているみたいな人も多いのかなと思っていて、中等教育で言うと例えば今は探究学習のマイプロジェクトとか、そういった動きもあったりしますけれども、そういう形で子供の頃から自分の希望を言語化したり、組み立てていく仕方とか、あとそれを実現するための学びとか、そういったものが岩手の中で育まれていくような土壌とか環境というか、県全体の取組があって、その中で出ていったときには、少し出ていくときにはいつ戻ってくるか分からない、要はこれで何人帰ってくるのですかみたいな、やっぱり財政にもなかなか説明できないような施策ではあるのですけれども、そういうことをちょっと思い切ってやったりみたいなことが豊岡のまちのブランドになっていって、結構シビックプライドの形成につながっていったりみたいな話をよく伺っています。

なので、今後の希望の後押しするというところでいうと、やっぱり子供の頃からとか、卒業するタイミング、いろんなライフステージに併せた、ちょっとすぐ効果が出るのかど

うなのかよく分からなかったり、議会とか財政になかなか説明しにくいけれども、でも心はつかめるんじゃないかみたいなものとか、ちゃんと県民に響く感情をちゃんと揺さぶったり、価値観形成につながるものなのではないかみたいな部分をどのくらいやれるか、10年後に回収できますか、20年後に回収できる施策なのですけれども、令和８年度の予算でやりますみたいな、そういった攻めの部分でも守りの部分でもそうですけれども、ちょっと時間がかかることを前提とした希望の後押しの土壌形成みたいなところにどのぐらい取り組めるかというところが今後必要になる部分なのかなと考えたりしております。

ちょっと最後に１個余談なのですけれども、無関心層へのアプローチということで、10年前、11年前ですか、ＮＰＯ法人ｗｉｚさんというところが「東京で岩手な人に500人と会うまで帰りません企画」というのをやりまして、これは何をするものかというと、東京にいる岩手出身の人とただひたすら500人以上ずっと会っていくみたいなことをやっていて、結局700人以上ぐらいに会ったのです。これは、何をしているかというと、「岩手な人いませんか」みたいな感じでプラカードといいますか、こういうのを持って、渋谷とかいろんなまちでただ探して歩くみたいな、一応渋谷警察署の許可は取ったのですけれども、東京に私も当時いまして、ここに私もいますし、岩大に今いる坂口奈央さんとか、いろんな方がいるのですが、たまたま歩いていたら岩手だというので、ちょっと寄ってみましたみたいな人とか結構いろんな世代の方と会って、こういう方々に岩手で今こういうことやっているのですよみたいなＰＲの資料を配ったりみたいなことを２日間ずっとやり続けたイベントがあって、これ昔広聴広報課さんでやっていたいわて県民参画広報事業というやつをたしか活用してｗｉｚさんがやったものなのですけれども、一見すると結構ふざけているような企画なのですが、２日間で首都圏で700人以上の人と出会える企画というのはなかなかないといいますか、こういうちょっと少し回りくどいようなこととか、少し遊び心とか余白なんかを持った動きとかもできると希望の後押しみたいなのが、ある種、強制されたものではなくて、楽しんで、要は施策としても、政策を立案する側もおもしろがってやれるみたいな、そうなっていかないと、気持ちの伝播みたいなのがつながらないかなとか、思ったりしております。以上です。

○牛崎志緒部会長　ありがとうございます。すごくいい取組なさっていたのだなと思いました。

では、山影さんお願いします。

○山影峻矢委員　お世話になっております。manorda いわての山影でございます。よろしくお願いいたします。

冒頭の西條さんのお話を聞いて、就活しながらとてもいろいろ考えているなと思って感心して聞いていたところです。実際、無関心層へのアプローチですとか、お話をお伺いする中で、私も就活のときのことを思い出していて、私とか柊平さんとかの就活時期というのは氷河期と呼ばれる時期で、手当たり次第いろんな企業を受けて説明会に行って、受けられるところをがんがん受けてみたいなのが多分就活生のマインドだったのですよね。なので、そういった観点で私も西の企業では受けたりしていたのですけれども、やっぱり企業風土とか、地域の風土とか、関係ないところに行けるかというと、なかなか行けないな

と感じたのが当時の就活生時代の私の気持ちで、私は実際県内に戻ってこようという意思は特になかった中で、それこそマイナビとか、就職サイトで今の会社の情報をぽろっと見て、あっ、受けてみようと思ってずるずると、気づいたら岩手に戻ってきたみたいな無関心層と関心層の中間みたいな就活であるとか、学生生活を送っていたところがあって、私のこの話の中で何がキーかなと考えたときに、はざまにいる学生とか若者というのは多々いるのではないかなと思っているのです。そういった方々が悩んでいる、はざまにいる人たちに選択肢を与えるということが大切かなと思っていまして、前回のこの部会の中でもお話しさせていただいたのですが、継続的にこの情報を届ける仕組み、体制づくりというのがまず必要なのではないかなと思っています。岩手の企業情報ですとか、前回のお話でもあったような副業とか兼業の機会の見える化みたいなところ、こういったところも県内の企業さんでも発信しているところはあるのですが、やはり人的もそうですし、資金的もそうですし、リソース不足というのが県内の会社さんが多く抱えている課題かなと思っていまして、なのでそこに対して行政として一部アプローチできたらいいのではないかなと思っています。

これも前回の話の流れであったとおり、若者の希望とか、価値観みたいなところも多様化していますし、それこそ我々の希望とか価値観というのは、当然年数を重ねれば多様化しているのですけれども、そこに併せて情報届けることというのはやっぱり不可能かなと思っています。なので、県内の企業だとか地域の仕事だとか、副業、兼業みたいなところの情報の幅を広げて発信していくということが重要なのではないかなとこの１週間程度で感じたところです。

私自身も県内の企業、銀行という背景があるのですけれども、本当にいろんな企業様と関わらせていただく中で、こんな企業あるんだとか、こんな仕事、こんな領域ってあるんだなですとか、それこそ柊平さんのような業種みたいなのも最近になって、そういった中間支援みたいな仕事ってあるんだとか、やはり学生の持ち得る人脈とか幅だけでは知り得ない仕事だとか、人とのつながりというのは多々あるので、そういったところを面的に発信できる仕組みというのが必要なのではないかなと思っています。何でしょうね、「知らなかった」を減らしていくことが重要なのではないかなと思っています。

なので、そういった関わり方が岩手県と首都圏とかそういったところとの接点をつくっていくことが大切なのではないかなと思っています。実際に今回のテーマ、希望が実現できる社会とは、というところなのですけれども、岩手に定住する人だけを増やすだけではなくて、住む人、県外にいる人もそれぞれの状況に応じて関わり続けられるみたいなところが一番のテーマかなと思っていますので、そういったところに対しても情報提供の機会を継続してつくっていくということが大切かなと思っています、というところが私の前回の部会を踏まえての意見です。ありがとうございます。

○牛崎志緒部会長　山影さんありがとうございます。

では、続いて山屋さんお願いします。

○山屋理恵委員　お世話になっております。前回、全ての女性のライフコース、岩手で生まれて生きて、年を取っていくということを考えたときに、私は本当にどんなお話をすれ

ばいいのかなというのを毎回悩みながらですし、牛崎さんのようにつれづれなるままに前回もお話しさせていただきましたが、今回もですね、やはり「希望」といったときに、私たちの生きにくさとか、生きやすさという内容になる。困ったときとか、どんなふうに生きていけるような仕組みがあるのか、希望を持てるまちなのかということが一番大事なのではないかなと思います。もしかしたら、希望いっぱいで、若いときに、ここで働こうとか、こういう仕事をしようと思ってもいろんな問題が出てきてしまう。特に女性は、「生き方」を見たときに働く先と、その後にライフイベントをどうしても考えます。産む性を持っているということで結婚するのかとか、子供を持つのかどうか、周りのロールモデルを見ていく。「うちのお母さんみたいに」とか、「この地域の人たちはこうだから自分もこうなるのかな、こう生きていかなければならないのかな、」というそういった縛りをなくしていくこと、希望を広げていくという取組を進めていくことがここで生きていこう、ということにつながっていくのではないかなと思っています。

究極をいえば、「変わらないかもしれない。」でも、これをやれば、もしかしたら変わるかもしれない、と少しでもその希望を持てるところにつなげられるような施策をちりばめることがすごく重要なのではないかなと思っています。そのために、人の意識と、組織の仕組みと、地域の空気の３層を変えていくということがやはり女性活躍や女性がここで安心して生きていくという取組で重要なのかなと思っています。

前回も、結構私は厳しい話をしました。自殺率も高くて、若者の流出も多くて、低賃金で、男尊女卑が強い県で生きていこうと思えるか、というような話もさせていただきました。例えば、大学進学率の話も前回しましたけれども、岩手では大学進学率が 49％ぐらいになっている。でも、その中から県内の大学に進学する人たちが約 28％いて、他に県内の専門学校とかに進むことを考えると、実は岩手で生まれた人たちの約大半は高校を卒業しても岩手にいるのです。外には出ていない。そして、それは女性のほうが多い。なぜでしょう。女性のほうが多いということを考えたならば、やっぱり高校もそうですけれども、その後の地域での生きやすい取組をもっと若い女性たちやいろんな人たちが知っていく、こういう意識改革が必要だとか、県はこういうことを取り組んでいるのですよ、この後のライフコースとか生き方、こういう希望を持ったり、こういう取組とか支えがありますよ、ということを示していくということがすごく重要かなと思っています。だから、対策は高校、大学だけではありません。あと中小企業がほとんどですよね、岩手の場合ね。大きい会社がそういった取組をしているからといって、それが県民皆さんに広がっているかというと、絶対そうではない。そして、こういう取組や話合いに参加できている人たちというのは本当にごく少数であって、せっかく県がこういう取組をしていますよと広報の機会があったとしても、そこまで浸透していないという本当に残念な状況があるから、その部分に力を入れていってほしい。繰り返しますが、女性のほうがこれからの生き方、今までみたいに岩手で暮らすとこういう生き方しかないのかなとか、結局は滅私奉公しなければならないのかな、我慢しなければならないのかなというのを早く払拭するような取組を各部門で、そして高校までではなくて、全ての人たちに県から発信していくという施策が必要だと思います。県がもっと具体的に言っていくことが重要だと思っていて、例えば知事が今年、男女共同参画プランが新しくなったときに「ジェンダー平等がスタンダードな県にする」と言っているのです。でも、それを知っている県民がどれくらいいるのだろう。そ

れに伴う取組みは何かとか、そうでなければ女性が安心してここでいろんな選択していくことが無理だということですね。ジェンダー平等がないということは「県の未来を削る」のだよ、ということをトップが言っていったり、様々な人が知る機会をもっと増やしていってほしい。意識改革というのは数値化はできません。さっき佐藤さんが言ったようになかなか数値にしていくというのは難しいことですが私たちは今挑戦しなければならないのです。一つの法律や制度だって浸透するまでに 10 年ぐらいかかると言われている。生き方とかのことを問い続けていくというのはすごく時間がかかるかもしれませんが、でもこの価値観の形成、意識改革って変えなければ、このまま人は、流出していく。佐藤さんが一番最初のときに資料を出してくださったように、私が地元に戻らない理由という資料、それそのままなのですよ。今の 60 代、70 代の女性たちが岩手について言われてきたことが、今の 20 代、10 代の皆さんが言われていることと全く変わっていない。ここを変えていくということと、せっかく社会が変わってきているのですけれども、その施策の発信の方法を変えていくということがすごく重要かなと思います。

○牛崎志緒部会長　ありがとうございます。山屋さんのようにずっと一線でこの取組をされていた方から、私たちはもっと学ぶべきだなといつも思います。ありがとうございます。

　では、吉田さんお願いします。

○吉田知世委員　前回のお話の中で、生きやすさだったり、選択肢として岩手を挙げられるというために、もっと岩手について広めていこうというお話があった中で、自分のこれまでの情報をキャッチしてきたことを、前回から今日までの中でちょっと考えてみたのですけれども、私は今、岩手わかすフェスという団体に所属しているので、周りの人のお話から自然と岩手の話が入ってくるのですけれども、さっき西條さんがおっしゃったみたいに、興味のない人には届かないんだなと。これまで、私が今日まで考える中では、どうやったらキャッチしてもらえるのだろう、どうやったら普通の岩手県出身の普通の大学生、特に岩手に入りたいという熱もない子たちにどうやったら届けられるのだろうとずっと考えていたのですけれども、西條さんの御意見で興味のない人には届かないのだと、届けようとしても難しいのだということで、逆にもう割切って、ちょっとでも岩手が気になるなとか、ちょっとだけ岩手の就職調べているよという潜在的な層よりも濃い人たちに刺していく方がもっと確率が上がるのだなということにさっきのお話を聞いていてすごく気づきました。前回の話もちょっとあったように、広く浅くになり過ぎてしまうととてももったいないなと思っていて、なので潜在的にもしかしたら戻るかもしれないというか、戻りたくないよりも上の人たち、可能性ある人たちにどんどん刺していく、そっちのほうに重点的に置いていくほうがすごく可能性が高く、情報をキャッチしていただけるのではないかなと気づきました。

　そこを、ではどうやって広げていくかというのを考えたときに、それこそ私たちの岩手わかすフェスという団体もそうですし、アネッコさんという銀河プラザのＰＲをする団体さんもそうですし、さんさ踊りに参加している赤坂さんささんもそうですし、そのように岩手に何か関わりたいよと思っている人たちから発信していく、そういうＳＮＳ見ている人たちというのは、別にその団体に所属していなくてもちょっと岩手が気になるなという

層だったりもすると思うので、そういう団体を使っていくことというのもいいと思いますし、前回の話に戻ってしまいますけれども、中学生、高校生のうちにそういう情報を広げていくという方法があるかなと思っております。

皆さんからお話が出ている情報発信、こういう生き方があるよという情報発信をする中で、すごく自分の中で気をつけたいなと思っているのが、こちら側は善意で情報を発信しているのですけれども、その情報に偏りがあると生き方を固定しているような捉え方をされてしまうかなと思っていて。私の同級生とかだと、岩手にいたら公務員とか銀行で結婚して専業主婦になってというのが当たり前だよねみたいな雰囲気がずっと岩手にいるとあるらしくて、周りがそうだからみたいな。自然と流れている情報というのは、昔ながらの方に典型的な形だなと思っていて、なのでこういう生き方もあるよという提示をするときに、そういう強制力を捉えてしまうこともあるのだなということを念頭に置いた上でいろんな生き方を提示できたらなと感じております。

すみません、前回の振り返りと決意というか、意識的にこうしていきたいということの話になってしまったのですけれども、以上になります。本日はよろしくお願いいたします。

○牛崎志緒部会長　ありがとうございます。吉田さん、岩手わかすフェス、ここに関わっていらっしゃる委員の皆さんもたくさんいらっしゃると思うのですけれども、あのぐらい長く続けて、あれぐらいたくさん集めることができるイベントというのはないので、そこから今、吉田さんがやっていらっしゃることだからこそヒントが多分あるのだろうなと私はいつもあのイベントを拝見していて思います。ありがとうございます。いろいろ私も吉田さんから勉強したいなと思うことはたくさんあります。引き続きよろしくお願いします。

それで、私宣言しておくと、全く落としどころがない話をこれからしてしまうのですけれども、本当に皆さんから話を伺って、そうだよなというのを一つ一つに反応したい気持ちになりつつなのですけれども、私は今ジョブカフェというところにいるわけなのですが、すごく大事にしていることというのが、親でもないし、あとは学校の先生でもない、第三の大人とのパーソナルなつながりをどうつくっていくか。私たちは高校に行って 100 人、200 人とか、大学に行っても 100 人、200 人、そういった方々に企業さんを紹介したりするという機会がどうしても多いのですけれども、そういった学校の枠組み、その運営上の枠組みの中でもどうやったらパーソナルにつながることができるのかというのを事業の運営上いろいろ気をつけているのです。というのも、どうしても企業として物体を見ると、そこで思考が止まってしまうのと、あとは皆さんも聞いたことがあるかなと思うのですけれども、高校生だったり大学生が仕事を選ぶ上で重視することというのは結構ぶっちぎって顕著に休日しっかり休める、あとは仕事に見合った給料をもらえることとか、職場の雰囲気がいい、働きがいと働きやすさ、というところの両面を確かに示しているものではあるのですけれども、条件面だったりとかというのが当たり前に整備されているということに非常に重きを置く。これは当たり前ではもちろんあるのですけれども、そうではない価値観というのを与えたことがないから分かるわけがないなと思っていて、それを全て知った上で仕事するというのは無理だと私も思っています。

さっき山影さんがおっしゃったように、知らなかったということをできるだけ減らしたい、これもすごく私は大事なのですけれども、実はもう一つの柱があって、知らなくても

大丈夫というのを分かっていてほしいなというのも一つあります。「知らなかった」をできるだけ減らすということは、私はすごく大事だし、この両輪というのは結構キャリアを考える上で双方大事だなと思ったりしました。なので、山影さん言ってくださってありがとうと思って聞いていました。

なので、さっき皆さんが話をする中で、できるだけ初等教育からいろんなパーソナルのつながりをつくっていく、そこって限度はあるけれども、そこを諦めないということも改めて大事だなと私自身は思ったのと、あとは皆さんからの言葉にもあったように、送り出すとか、あとは迎え入れるというときのマインドを持っている人がこの県民の中にどのぐらいいるのかというところでいくと、残念ながらＵターン、Ｉターンを我々が支援している中でも、せっかく満を持して岩手に来たかったといっても、思ったのと違うとか、あとは過干渉になるのがすごく嫌でというので、出ていってしまう人も一定数いたりするのです。だから、そこは選択なので、合わなかったのだなと。まず、それはそれで一つの選択肢だとは思うのですけれども、その送り出すとか迎え入れるというのを県民一人一人がマインドで持つというのって、さっきの取組が一つ効いているなと思うのと、機運醸成というのもずっとやってきたような気がするのですけれども、そこに岩手らしさを求める必要があるのかなとか、これは答えはないですが、考えたいなと思っていることです。

結局私自身、県民がどのぐらい自分が幸せかどうかと、まさに岩手県の幸福度指数というところはそこに、だからそこに行き着くのかという話になってしまうかもしれないのですけれども、いわゆる地域のインナーブランディングというのが今非常に叫ばれている中で、一人一人がハッピーで、ハッピーだから、おいでよとか、ここいいところだよとか、そんなふうに企業でもインターンシップに行った学生が「この会社やめたほうがいいよ」みたいなことってたまにあるので、企業の中のインナーブランディングだったり、組織のインナーブランディングだったり、そういった中のエンゲージメントの向上というのはこれからすごく大事にまさになっていくのだろうなと思うのですが、山屋さんがさっき３層と言ったのはちょっとメモし切れなくて、組織と地域と、あともう一つの３層というのは何でしたか。

○山屋理恵委員　組織と地域と人の意識ですね。数値で測れないのばかりで。

○牛崎志緒部会長　ばかりなんですね。

○山屋理恵委員　だけれども、人がつくってきたものです。

○牛崎志緒部会長　全て指数化するかというと、難しいけれども、ちょっとチャレンジもしてみたいなと思ったりもしていますというのを皆さんのお話も聞きつつ、自分が大事にしたいな、考えたいなと思うことをちょっと共有させていただきました。ありがとうございます。

では、続いてここからまた意見交換に入っていきたいなと思っています。今日の議題が、先ほど事務局からも話がありましたように「希望が実現できる社会について」となるのですけれども、さっき御紹介いただいた資料の、みんなが迷子にならないようにつくってく

ださった資料の 12 ページあたりをみんなで手元に置きながら話をするといいのかななんて思ったりしました。

ちょっとこちら皆さんお手元にありましたら御準備しつつお話しできればと思うのですが、「希望が実現できる社会について」、枠組みをつくっていただいたので、この枠組みの中でつながりの拡大や変化に適応するとか、あとは各ステップも含めてまとめていただいています。それぞれ今、先ほど委員の皆さんから御発言をいただいた内容に関して補足したい点ですとか共感、あるいは私はこう思うでもいいので、そういった御発言も含めて挙手いただきながらお話展開していければと思います。

では、いかがでしょうか。

○佐藤柊平副部会長　牛崎さんよろしいでしょうか、佐藤です。

○牛崎志緒部会長　はい、お願いします。

○佐藤柊平副部会長　今日残りの１時間ぐらいぼ議論の仕方として、つながりの拡大と変化に適応の部分についてはこう思うとか、こういうのがいいんじゃないかみたいな論点を絞っていく感じでしょうか。

○牛崎志緒部会長　この後 60 分ほどお時間を頂戴していましたので、このつながりの拡大のところと変化に適応するところの２軸で私が時間を配分していこうともくろんでおりました。すみません、ありがとうございます。

○佐藤柊平副部会長　分かりました。そういう意味では、１個ずつここの部分についてみたいなので、順番にやれると、論点もしゅっとして話しやすくなるのかなと思ったりもしたのですが、いかがでしょうか。

○牛崎志緒部会長　ありがとうございます。そうですね、そうしたら先ほどの皆さんのコメントから私もという何か補足がなければそのように進めさせていただきますけれども、よろしいですか。ありがとうございます。

では、このつながりの拡大というところから、様々こちらの方に意見を頂戴したなと思っていますが、希望が多様化していて、県外から岩手に関わる仕事をしたいという状態になる上で県外人材の受入態勢の整備であったり、情報発信であったりというような施策をしていく、こんなようなステップを書いていただきましたと。どうでしょう、どこからでも私はいいかなと思っていて、①番についてとか、②番についてというところで各委員の皆さんいかがでしょうか、お話しいただければと思います。この番号を先に言って、この論点で私はこう思いますとか、ここの意見どうでしょうかみたいな感じで展開していきましょうか。

○吉田知世委員　１個いいですか。①番の希望の多様化なのですけれども、そもそも今岩手にある希望が何で、その多様化したときの希望はこういうのがあるよみたいなのがいま

いち私自身分かっていなくて、今例えば私の年齢で、女性だったら、それはさっきおっしゃったみたいに福利厚生がすごくて多くて、育休、産休が取りやすくて、家族がいても働ける岩手だったらいいなと思ったりという希望があったり、もしたしたら人によってはめちゃくちゃ稼ぎたいけれども、岩手に行きたいという希望であったり、いろいろ多様化というのは難しいなと思っていて、そういう希望の多様化というのはどういうのがあるんですかねみたいな、もし皆さんの関わっている団体とかそういう企業でこういうのがあるよみたいなのがあればイメージしやすいなと思っているのですけれども。どうでしょうか。

○牛崎志緒部会長　吉田さんありがとうございます。そうですよね、多様化。

○吉田知世委員　希望の多様化にしたいということですか。つながりを拡大するためには希望を拡大していこう、岩手県外から岩手に関わる仕事がしたいと思っている人たちを入れようみたいなこと。

○佐藤柊平副部会長　その点に関して、ここの意味は恐らくですけれども、岩手とのつながり方が、ただUターンするとかだけではなくて、それこそ関係人口みたいにつながり方の希望が多様化しているみたいな、例えば転職なき移住みたいなのもあるでしょうし、２地域居住とか、副業、兼業みたいなところとか、岩手と地域との接続とか関与の仕方の選択肢が広がってきている、そういう選択肢があるよというのが言われてきている中で、Uターンはしないけれども、岩手に関わりたい、その方法としていろんな方法があるよみたいなところでの希望の多様化みたいな部分のことなのかなと。

○吉田知世委員　では、①番の中に②番が内包されているみたいなイメージですか。希望の多様化の中で、県外から岩手に関わる仕事がしたいというのも希望の多様化の中の一つであるみたいなことになるのですか。

○佐藤柊平副部会長　それもあると思います。ただし、米印、点線吹き出しの中の内容は一例みたいな部分というのも事務局のほうからもあったと思うので。

○五十公野政策企画課主任　これに関して事務局から補足させていただいてもよろしいでしょうか。

○牛崎志緒部会長　お願いします。

○五十公野政策企画課主任　このつながりの拡大の①の希望の多様化というのは、あくまで希望が多様化している背景を意図して書かせていただきまして、先ほど佐藤さんからもおっしゃっていただいたように背景として、希望が多様化しているということがあって、例えばこうした背景から、県外から岩手に関わる仕事がしたいというような御意見もありましたので、そういった希望があるとすると、それに対する希望の後押しの一つの手段として、県外人材の受入態勢の整備・情報発信というようなアプローチがあるだろうという

のが③になります。それが希望の後押しになり、④で希望の実現につながっていくというような、そういう流れをイメージした一例でございます。

○吉田知世委員　ありがとうございます。

○牛崎志緒部会長　そうですね。なので、②、③、④が例になるので、この「つながりの拡大」というものに関して今日のテーマである「希望が実現できる社会について」なので、希望が多様化しているからこそどう希望が実現できる社会に向かっていけばいいのかというところの話を拡大の中のこの論点の中でお話をいただくというような整理なのかなと思っています。なので、②、③にあまり引っ張られずにお話ししていけるといいのかなと思いました。

吉田さんありがとうございます。一緒に私も整理できてよかったです。

○吉田知世委員　ありがとうございます。

○牛崎志緒部会長　この点、どんなつながりが、「無関心層へのアプローチ」というのを西條さんもキーワードとして挙げていただいたりですとか、潜在層をどうしていくのかですね、様々つながりというところの拡大については皆さん御意見を頂戴していましたけれども。

○佐藤柊平副部会長　つながりの拡大というところに関して、ちょっと私の方から一つのコメントとして共有、お伝えできればいいかなというのが、端的に言うと社会関係資本の拡大とか、広がりみたいなことを推進することが希望の実現につながる部分が大きいのかなと思っていまして、社会関係資本は、いわゆる人とのつながりとか、信頼関係とか、そういった社会とのいろんな接続の仕方が、個人でいえばその人の資本になっていって、いろんなお仕事とか生活の基盤をつくるよ､みたいな部分があるかなと思うのですけれども、県内の中でも例えば若い世代同士とか業種を超えたいろんな人のつながりが生まれるとか、社会関係資本的な部分が豊かになっていくことでこういう働き方もあるのだと、あの業界で同じような世代のこういう人が頑張っているから自分も頑張ろうとか、こういうことをやってみようみたいな、そういった意欲やエンパワーメントにつながる部分があるのかなというのもありますし、岩手の中の人と外の人、わかすフェスさんとか首都圏で活動しているいろんな団体の人が首都圏で活動している人同士のつながりとか、あるいは首都圏と岩手とのつながりみたいな、そういったいろんな社会関係資本が増えていくとか、広がっていくみたいな部分を後押しする、そういったことが可能性の拡大とか、安心できる、両方の要素につながる部分があるのかなと。なので、そういった意味では、例えばシングルで子育てをされている方とか、あるいは社会的に苦しい立場にある人たちもそういったつながりがあることでどうにかできるとか、課題解決方法にアクセスできるみたいな、やはり社会関係資本というのが結構希望の実現のいろんなベースになるのではないかと思っておりまして、これはＵ・Ｉターンみたいな話だけではなく、中に住んでいる人たちとか地域の定着みたいな、そういった部分にもつながるのかなと感じたところです。

１個の論点といいますか、コメントとして、社会関係資本の拡大につながる取組をするというのが希望の後押しの実現につながるのではないかという意見でございます。
以上です。

○牛崎志緒部会長　ありがとうございます。そうですね、心理的なつながりであったりとか、そういったところというのはなかなか明文化できない部分でもあるので、すごくいいキーワードをいただいたなと思います。いかがでしょうか。

○西條匡杜委員　すみません、１個いいですか。

○牛崎志緒部会長　西條さんかな、はい。

○西條匡杜委員　いろいろ話を聞いていて、残ってほしいという希望がプレッシャーになることが多いみたいなので、多分いろいろこれまでの部会で話を聞いたのですけれども、怒られるかもしれないですけれども、こっちに住んでいるとそういうことがないというか、地域のつながりがよくも悪くも希薄ですし、結局仕事が、東京にはあっちゃうので、通えてしまうので、そういうのがなかなか言われる機会がないのですよね。だから、実際言われて、岩手に残るよという人は「残るよね」と言われても「はい、そうです」と言って終わると思うのですけれども、そこでプレッシャーを感じる人というのは何かしら違う思いがあってプレッシャーを感じると思うのですけれども、それが申し訳ないのですけれども、具体的にイメージができないので、そういう感じたことがある、経験があるという方がいればもしかしたら言いにくいかもしれないですけれども、具体的なエピソードも踏まえてお話聞かせていただきたいなと思っていて、大丈夫ですか。

○牛崎志緒部会長　ありがとうございます。さっき吉田さんからも自分の情報に偏りがあると何かしら型にはまってしまった情報提供になっていないかというのを少しお話もいただきましたよね。確かにいろんなプレッシャーというのは、つながりをつくる上ですごく気をつけなければいけないなと思います。
どうでしょう、そんな御経験をお話しいただける方はいらっしゃいますか。

○吉田知世委員　人生の節目で、言った本人たちは本当に悪気がなく普通にいいところだよということを多分言ってくれているのだと思うし、この家はすごく大事にしてほしいんだよということを伝えているのだと思うのですけれども、そういうところにプレッシャーを感じて、ちょっと心の片隅にあるものとして残っているという感覚はすごくありますね。

○西條匡杜委員　ありがとうございます。この話聞いて、すごく身近な人物に、そういえば同じこと言っている人いたなと。父親なのですけれども、宮城から千葉に出てきていて、そのときに結構言われていたらしいというのを先日母から聞いていまして、ああ、すごく身近なところにいたわというのを今気づきました。ありがとうございます。

○吉田知世委員　でも、東京に出てきてそういう話はなかなか聞かないので、私の出てきた大学の友達とかだとみんな関東の子たちで、そういう子たちでそういう話で悩んでいる子はいないので、別に。考えているのは、やっぱりいつも地方ならではなのかなと、今の話で感じました。

○牛崎志緒部会長　いかに伝える側に自分たちが選択肢を増やしているだけなのだということをすごく大事に思わなければいけないですね。私も来週東京でイベントをさせていただくときに企業さんをお連れして、学生と会っていただくようなイベントがあるのですが、そのときに岩手にぜひ戻ってきてくださいというメッセージは私たちは伝えたいのですけれども、そこは選択肢ですね、そうじゃないキャリアもあるし、そこは皆さんが決めていい。でも、その決める上でも、決めるためにその本人に決めるための素地がないと決められないわけなので、その選択肢を与えて手を引くというだけでも、何かそこもまた無責任だったりするとすごくもやもやする話をしますけれども、すごく難しいですよね。何ていうでしょう、今のはひたすら私の心の叫びだけを言っているのですけれども。

山屋さん、どうぞお願いします。

○山屋理恵委員　選択肢を決めるための素地というのは、そのとおり岩手でどういう教育を受けてきて、どういう生き方をしてきて、どういうものを学習してきたかということだと思うのです。ここにはいい思い出がないとか、嫌な思いをしそうとか、自分の生き方を実現できないなと判断する基準というのは学びです。

やっぱり教育の中でこういった取組をしているよということを伝えることがすごく大事かなと思うのです。

また私たち東日本大震災を経験していることと、その取組が再構築のヒントになってきて、避難した後に岩手に戻ってきている人がいるのかとか、被災地でで若い人たちがどのような生活を選択したのかとか、実は大きな視点を持っていると思うのです。さっき佐藤さんが言ったソーシャルキャピタルというのは、多くを失った復興のために一番必要なもので、人とのつながりがあるから戻ってきたり、そこで生きていくということができているのですよね。ですから、そういった地域づくりというのがすごく重要、それって結局「人」なのですよね、あとは企業の在り方、働き方なのですよね。ただ、お金を稼いで日々の生活を守るのであれば、どこでだってそれはできるかもしれない。職種だって選ばなければできるかもしれないけれども、岩手で働き続けるということや、日々の生活は、人は一人で生きていけない、地域や子育てとか、自分が年を取っていったり、何かあったときには誰かの支援や様々な施策があって、私たちは地域で生かされていくのだというようなことに気づいていく年を重ねれば、そういった事態が起これば、やっぱりその地域の在り方というのがすごく重要になっていく、施策づくりというのは「地域づくり」です。今のしくみを変えて人の意識を変えていくこと、災害に遭ったとしてもここで生きていける、ここで仕事もしていけるし、この仕事を起こそうとなる希望につながっています。

だけれども、残念ながら東日本大震災で県外避難者の人たちはなかなか戻ってきたくても来れなかったし、戻ってくる選択が少なかったそういう声を聞くと近くに病院がないとか、学習する機会がないとか、あとは大事な人がもういないからとか、避難先の方が生き

やすいからと、いろんな理由がありました。被災者支援にも私も県さんと発災直後から今も携わらせてもらっているのですが、そういった声でした。ただ沿岸では若い人たちが様々な起業をしていったり、カフェを開いたり、仕事を起こしたりという取組が行われました。さっきのソーシャルキャピタルには、３つの要素があって、「交流」と「他者への信頼」と「社会参加の機会を保障する」、この３つのポイントをつくっていくことによって、ソーシャルキャピタルが得られるのです。復興支援で沿岸では、この３つのところが充実していると若い人たちが入れた、人との交流の場をつくること、他者を信頼する、人を信頼すると、しかし、幾ら信頼していても、女の子なんだからこうするべきだとか、そういったことの言葉があると、例えばどんな困難や障がいを持ったにしたって、誰かと関わる場がある、そういったまちであれば生きていけるとかなるのです。なので、そういった視点もぜひ入れていってもらいたいなと思うし、岩手って、災害による人の生活困難をも乗り越えようとしてきているし、過去も乗り越えていた。そういったことも少し参考にしていけたらいいなと思っています。ちょっとまた話が広がってしまいましたけれども、思いました。

○牛崎志緒部会長　ありがとうございます。前回皆さんが今「つながりの拡大」と「変化に適応」という大きな２軸でお話をしていきましょうという話をしましたけれども、そこの希望の後押しをする上で、今山屋さんがおっしゃったような、失敗しても大丈夫だよ、安心できるよという社会参画をする上でもそういった安心できる、あとは挑戦できる、大きく２つのまた後押しをする上でのパワーがあるというところは私たちも今議論する中でも振り返ることができました。ありがとうございます。

今つながりという、どんどんつながりを拡大していくという話をもう少し皆さんの御意見を伺っていきたいなと思うのですけれども、潜在層をどうしていくかという話もありましたけれども、あとは無関心層、あとはそこに、私は柊平君がまだ東京にいた時代あるいは今、吉田さんが東京から岩手を応援してくれているところで、ちょっと層に分けて整理すると、あんまりよくないかもしれないですけれども、潜在層、無関心層、参画はしてくれる、参加をする参加層と、あとは応援してくれる層、さらにエバンジェリストというか、伝道師みたいな感じになってくれる人みたいな、何段階かの層があるかなと思っていて、この辺りの話は佐藤さんが詳しいかもしれないのですけれども、いろんなつながり方を許容する、あそこで参画ができる、安心できる、そういった関わり方のペルソナを設定した方がいいのかどうかわからないけれども、ここら辺、つながり方、つなげ方みたいなところを皆さん御意見少し伺いたいなと思うのですけれども、どうでしょう。

吉田さんはわかすフェスやって、佐藤さんもわかすフェス立ち上げたところの中で、その辺りどんな思いでやっていらっしゃったのかというところも含めていかがでしょうか。

○佐藤柊平副部会長　では、佐藤の方から手短に。わかすフェス自体は、震災をきっかけにボランティアを中心に、いわゆる復興支援という大義名分の下、関わってきた人たちが復興支援の中での一つ分かりやすい関わり方としてボランティア活動というのがあったわけですけれども、いい意味で沿岸部が落ち着いていくという日常を取り戻していく中で、やはりボランティアという形でのニーズみたいなのはどんどん縮小していったり、あとあるいはボランティアの中でも心のケアとか、ある意味ちょっと専門性が必要になってくる

みたいな部分になってきて、普通の人たちがどのように参加、岩手に関わったらよいのかというやっぱり大きな転換期が 2014 年、15 年、16 年ぐらいのところはかなり大きくそこが首都圏というか、県外にいる岩手に関わっている人たちの中であったかなと記憶しております。その中で、全く別のというわけではないですけれども、ボランティアではない方法で何か岩手との接点とか、そういったせっかく岩手とつながれた人たちが岩手との縁を大事にできるという機会をつくろうということで、年に 1 回岩手関係の人がある種同窓会的に一堂に会して岩手愛を確かめ合おうみたいな、そういうような場をつくろうということでわかすフェス自体は始まっています。それは、首都圏で年に 1 回は集まって、今こうなっているんだ、ああなっているんだとか、岩手から来るゲストと、今こういうふうになっているとか、あるいは今度こういう活動をやるから、もしよかったら参加しませんかみたいなお誘いみたいなことも含めて一緒にできるような場をつくりたいですよねというのもありましたし、それをより副業という形で検討していった中で出てきたのが地域振興室さんで取り組んでいる遠恋複業課という動きであったり、そういうような形でちょっとステージに応じて用意するタマをいろいろ変えていったみたいなところはあるかなと思います。なので、大学生とか、社会人になった人あるいは復興支援からずっと関わっていた人なのか、それとも新たに今から関わりだそうとする人なのかによって、弊社も関係人口とか移住の取組この 10 年近く、私としては震災直後ぐらいからなので、15 年ぐらいずっとやってきているわけですけれども、やっぱりいろんな選択肢とか関わり方を満遍なく薄く広げて網を張っているみたいな感覚、網を薄く張っていこうみたいな。網を張って、そのいけすの中に網を張って、副業だよとか、わかすフェスだよみたいなのとか、協力隊あるよとか、転職なき移住だよみたいないろんな餌をまいて、そこに餌をまくと、池にコイがいたら、バチャバチャと食べに来るじゃないですか。いろんな餌とか好みをまいておいて、反応した人たちをかっさらっていくみたいな感じのイメージでやっているのですけれども、かっさらい方は別に移住だけではなくて、継続的に関係人口として関わるみたいなこともですね。何かそれを横断するいろんな取組がある中で、そこがてんでんばらばらに動いているような感じもあるので、そこを何か統合、横軸を刺していくようなことは必要かなと思っています。以上です。

○牛崎志緒部会長　私はてんでんばらばらでもいいかなと思ったりもするのですけれども、そういった分かりやすい入り口というのをつくってくれてきたのだなというのは改めて実感していました。層という言い方をしたのは、私は悪かったなと思うのだけれども、そこにどんな人たちのどんな希望、まさに希望という言い方をするとあれですけれども、そこに叶う入り口、場を設けてくれていたということを考えると、私ちょっと今ここでふと気づいたのですけれども、山屋さんはずっとこども食堂という場をつくることをしていらっしゃったし、あと manorda の山影さんのところだとＡＺＬＭというのはまた本当に全然違う側面でいろんな方々を集める場をおつくりになったというところですよね。そういったところをお一人お一人今ここにいらっしゃる方々というのは、本当につくっていらっしゃったのだなというところを踏まえて、今、特に山影さんですね、よくいえば経済的つながりというか、外貨獲得も含めてですけれども、manorda さんで取り組んでいらっしゃると思うのですけれども、その側面でのつながり方というところは山影さん何か感じてい

らっしゃることありますか。

○山影峻矢委員　ありがとうございます。ここまでの皆さんのお話を聞く中で、私も考えがぐちゃぐちゃになってきているというのが現状なのですけれども、まさにおっしゃるとおりだなという部分しかなくて、今まで経済的なつながりで、Ｕターン、Ｉターンとかは、これまで国の施策としても、例えば移住定住、戻ってきてもらって、岩手に住んでもらうみたいなところが大きな柱としてあったと思うのですけれども、そこというのは多様化する価値観とかに合いづらいというか、もうちょっと１段階とか２段階下げて関係人口の増加という方針に最近かじ取られてきたという認識がある中で、経済的な意味合いでいうと、戻ってきてもらって岩手で働いてもらって、お金を生み出してもらうというのが当然に県としてもいろんな企業としても経済的な活性化は人がいることで促進されるというのはそのとおりだと思うのです。ただ、一方で、それはこれまで過去軸の話で、ここからの話というのは、副業とか兼業みたいなところが割と一般化してきたというところが今の現状としてあると思います。

質問されたことを皆さんに質問で返してしまって恐縮なのですが、吉田さんも西條さんも今関東にいらっしゃる、首都圏にいらっしゃる、こういった部会に参画していただいているということ自体はそもそも関係していきたいというか、上位層というか、どっちかというとエバンジェリストに近い方々なのではないかなと思うのですけれども、今後のつながり方として、例えば副業とか、そういった価値観で、稼ぐという価値観でつながっていきたいという話なのか、そうではなくて、人とのつながりとか、地元だとか、関係者であるみたいな、非経済的ななつながりを求めているのか、そこというのはどういう価値観なのかなとちょっとふと疑問に思ったもので、いかがでしょう。

○牛崎志緒部会長　ありがとうございます、山影さん。皆さんに助けていただいている牛崎なのですが、まさに今もう一つの軸の変化に適応するアプローチというところに今少し議論を進めていく、そんないい投げかけ方をいただいたなと思っています。

吉田さん、西條さんの順番で、今の山影さんのお話を伺ってもいいですか。

○吉田知世委員　ありがとうございます。どちらかというと、今現状は非経済的関わりが自分の中ではすごく大事にしていきたいなと思っていて、もともと岩手わかすフェスに入った理由がホームシックで知っている人たち、なじみのある方々と関わっていきたいなというので、岩手のこんなイベントあるんだと関わったので、そういう岩手の人たちと関わっていきたいなとか、岩手が好きだなという部分で今は関わっているところでございます。今私の働き方がすごく土日出勤があったりとか、忙しさに波があるので、ちょっと落ち着いた生活をしていきたいなとなったときの私の選択肢としては、東京でやりたいことはもうやり切ったとなった場合には、岩手で働くということも視野に入れていきたいなと思っていて、ただそれが今まだ来ていないだけで、もし来たら、将来的にそのタイミングが来たら、もちろん経済的にも岩手に関わりたいという気持ちは将来的にはあります。

○牛崎志緒部会長　吉田さん、非経済的な関わりで今だと思うのですけれども、そのとき

が来たらとか、岩手で働いていくという未来がどのタイミングだったら訪れるでしょうか。タイミングとか、あとその条件だったりとか、どうでしょう。

○吉田知世委員　仕事で言うと、私は今ここまでやりたいという目標があって、そのやるためには岩手ではなく、今の会社でこのまま続けていったほうがすごくプロセス的にはよくて、なのでそこに到達するまでは頑張りたいと思っています。ただそこに行くまでの間に、例えば結婚することがありました、何か別のやりたいことがありましたとなった場合は、その自分の中での重要さをてんびんにかけたときに岩手で知っている人たちの下でゆっくり働くという選択肢と、新しく出てきたものをてんびんにかけたときに、もしかしたらこっちの新しく出てきたものが勝つ可能性もあって、そうなった場合は岩手で経済的に関わりをするということでなく、ずっと非経済的な関わりをするという方になる可能性も全然あると思います。今一番最短ルートでいくと、自分の目標を達成したならば岩手に行くというのが自分の中では一番最短ルートかなと思っています。

○牛崎志緒部会長　吉田さんのように、ここで今ちょっと岩手に戻りたいかもといったときに、岩手にいる私たちがどんな選択肢をお伝えできるかというところかなと思いました。ありがとうございます。

○牛崎志緒部会長　西條さんお願いします。

○西條匡杜委員　経済的なつながりか、非経済的なつながりかと考えたときに、私も非経済的なつながりの方が地域につながりがあるのかなと個人的には思っていたというか、さっきの佐藤さんの話を聞いて、副業という話を聞いて、確かに副業もやるときの気持ちの持ち方だと思うのです。ただお金が欲しいでやるのだったら、それはつながりとは言えないけれども、副業という活動を通して岩手に貢献するという気持ちがあるのであれば、それはもう立派な非経済的なつながりになるのではないかなというのをちょっと今、佐藤さんの話をお聞きして、そういう考え方もできるなと私個人は思ったというか、網に引っかかった人物という形になるのですけれども、そういうつながり方いいなと思っていて、何でかというと、自分は土木の勉強をしているのですけれども、そうなるとやっぱり働きたいところというのはインフラ系の企業とか、ゼネコンとか、そういう会社になってくるのですけれども、転勤がすごくて、本当は千葉にいたいなとか、岩手に行ってみたいなとか、宮城に行きたいなとか、そういう気持ちがあるのですけれども、やっぱりどうしてもそうならないための会社を頑張って探したりもしているのですけれども、ちょっと難しいなというのがあって、そうなってくると副業とかでお金稼ぎながらだけれども、気持ちを持ってつながるというのもいいなと個人的には思いましたし、岩手のために何かしたいなという気持ちを持ってもらうというのがつながりをつくる上でのマストなのかなと個人的には思いました。

以上です。

○牛崎志緒部会長　ありがとうございます、西條さん。

山影さん、お二人の意見で何か受け止めありますか。

○山影峻矢委員　ありがとうございます。お二人の話聞くたびに自分が活性化されるような御意見いただけるので、大変ありがたいなと思っています。

お話をお聞きする中で、関わり方で画一的なもの、こういったものという手法で一つ明確なものというのは打ち出せないかなと思っています。その中で、例えば県の資料を御提示いただいている人手不足、人材確保といかという大義名分は確かにあるとは思うのですけれども、それというのは最終目標かなと思っていました。こういった非経済的関わり方を持っていただいている方、いわゆる関係人口の質によって、最終的にこういった未来が生まれればいいなというところも思うので、なので非経済的に関わりたい、関わってもいいなと思ってもらえる人をどうやってつくっていくかというところから始めるべきなのではないかなと。さっき柊平さんもおっしゃっていたとおり、本当に遠回りの施策から始めていくしかないのかなと改めて、私もこういった地域活性化事業みたいなものをやっている会社なので、割と事業化するときとか事業を考えるときというのは、当然ＫＰＩとか目標を持って関係人口を何人創出しましたとか、移住定住何人つくりましたとかというＫＰＩ持って事業を進めるケースって多いのですけれども、これというのはやはり今というか、今の時代とか状況に合っていないのだなというのは改めて痛感したところです。

なので、逆にこの部会を通して私も勉強させていただきながら、逆に首都圏にいらっしゃる方がどういう関わり方をしたいかというのをちょっと学んでいきたいなと思ったところです。

○牛崎志緒部会長　ありがとうございます。おっしゃるとおりだなと。

柊平さんがつながり方のチャットを書いてくれました。これまとめてくれた感じですね。

○佐藤柊平副部会長　そうですね、多様な希望の入り口をつくったほうが、もうそういう網を総合計画の中でもいろいろ張っていくみたいな、これはどんな網なのかみたいな。それは、網だとあまり感じられないようにナチュラルにやるみたいなこと、あとは最近だと例えば２地域居住とか、外にいる人たちがどういうニーズが高まっているのか、兼業、副業というのは当たり前化してきていて、ちょっとナチュラルになってきている部分、特別なことではなくなってきつつあるのですのですけれども、最近だと２地域居住とかだと思っていて、そういった希望をどうかなえられるかを岩手が結構そこにすぐ早く着手できるかどうかみたいなのというのは結構大事かなとも思っていて、やっぱりそういった勘どころは現場のニーズと日々触れ合ってないと精度、ピントを外しちゃうんですよね。そういうことはもっと現場感覚を日々最新のものを吸い上げて、ひょっとしたら半年ごとにアップデートするぐらいのそういったスピード感なのだけれども、10 年後とか 20 年後を見据えてみたいな感じなのかと。

○牛崎志緒部会長　そうですね。本当に今すごくアップデートされるタイミングがすごく速いから、だからこそ政策においてもそこのアップデート領域の余白を持ちつつ、ＫＰＩは長めにという感じですかね。

山屋さんもいらっしゃるので、ひとつ皆さんに私からお伺いしたいなと思うことが１個あって、「生きやすい」というキーワードを前回も頂戴したのですけれども、都市部は楽しいというよりも生きやすい、そこの生きやすいという、私からするとよっぽど岩手県の方が生きやすいと思ったりもするのですけれども、そこら辺の価値観というのは、そこも多様化という言い方にしてしまうと、またおさまってしまうのだけれども、佐藤さんがおっしゃるいろんな網目というか、入り口というところがその価値観であるのか、２地域居住もある一定層の特別なものではないものに今後なっていくというところを考えると、そこの新しい価値観のアップデートというのはどんなふうにするとこの生きやすさというもの、何ていうのですかね、みんなの共有ができるのかなと思ったりするのですけれども、山屋さんどうでしょうか。

○山屋理恵委員　難しい問題だと思うのですが、生きやすさと暮らしやすさというのは、例えば首都圏の方が暮らしやすいというのは、物価が高くて家賃も高いかもしれないけれども、確かに仕事の職種も多いし、やりたいようなジャンルもたくさんあるし、文化とかも近くにあって、あと教育とかいろんなものでも情報が入りやすかったり、参加しやすいということもあるし、周りからの目、あなたは母親なんだからとか、女性なんだからとか、男なんだからとか、そういったことが多分少なくて、生きやすい。働きながらといったときに子育てとか設備が完備して子育てと育児の両立支援が、あったりするというような、日々の生活の生きやすさというのがあると思います。

岩手は確かに職種は少ない。企業も少ないかもしれないけれども、そこで働いていて生活をする上で、子供を育てる環境がちゃんとある。生きにくさのような視点とか、性別役割分担意識みたいなものがなかったりすれば私は生きやすいと思うのです。だから、そこのしくみを整備していくことがすごく重要かなと思っています。例えば高卒で地域の中小企業に入ったとしても、女の子の仕事はこういうものだ、男の仕事はこういうものだとまだまだ分けられていたり、地域が狭いだけに、あのうちはこうだとか、あの親父はこうだとか、いろいろな選択肢を妨げていたり、生きにくさにつながるということを例に挙げると意識を変える、しくみを変える、ということかなと思うのです。

岩手は職種は少ないながらも不平等がないような組織の在り方、仕組みとか、風土、慣習とかを変えていくということが一番重要になってくるのかなと思います。

最終的に「希望」というのは、ウェルビーイングを目指すということ世界的な流れからもＳＤＧｓの次のテーマに入るかもしれないと話をしましたけれども、やはり身体的にも、精神的にも、社会的にも、安心できて安全な良好な状態を保つことが希望、希望の実現につながっていくし、何かあっても大丈夫、困っても大丈夫な県とこの前言ったのですけれども、そういうことを準備していくということが急がば回れになる仕組みづくりなのかなとも思っています。それは、もしかしたら若者とか女性だけではなく、全ての人とか、いろんなものを持った人とか、障がいを持っている人とか、ＬＧＢＴの人とか、全ての人にとって生きやすさに関わってくるのかなと思っています。

○牛崎志緒部会長　ありがとうございます。いろんなコミュニティーを持っていらっしゃる皆さんだからこそ、佐藤さんが本当にたくさん多様な入り口がある状態を今一生懸命つ

くってくださっているのですけれども、入り口から入った人がそこから先のところで何かもやもやしたりとか、考えさせられたりとか、嫌な思いをしたりとかというところを何か課題感として何か持っていらっしゃるものというのは個々にあったりしますか。

○山屋理恵委員　では、続けておはなしさせてもらうと、岩手の若い女性たちは、一旦就職して、そこから出ていく率が高いのです。例えば就職で外に出ていくとか、進学で出ていって戻らないではなくて、一旦岩手に住んで五、六年して 20 代後半で人が出ていくというデータが出ています。それは、どういうことなのかということが一番の問題だと思っているのです。

○牛崎志緒部会長　どうでしょう、この観点で、今山屋さんがおっしゃっていただいた、何で出ていってしまうのだろうなと、入り口はたくさん設けたい、だけれども入っていただいてから出ていってしまう。そこは、いろんなポジティブな理由で出ていく方もいらっしゃるかもしれないですけれども、そこはどうでしょうか。

○山影峻矢委員　では、すみません、私からよろしいでしょうか。

○牛崎志緒部会長　どうぞ、はい。

○山影峻矢委員　これも実際に、山屋さんのお話を聞いていて思ったところではあるのですが、入り口は広くなっているけれども、広げた入り口に対して、例えば企業とか、働く場所がそこの最終形態がつくり切れていないというところが一つあるかなと思っています。

冒頭もちょっと私がお話しした中で、岩手県内の企業というのは中小企業がメインなので、従業員が 10 名以下の企業が一番多いゾーンになるのですけれども、例えばそこの中で、誤解なくしゃべれればいいのですけれども、10 名いる方で、例えば女性が育休、産休とかで休まなければいけないとなったときに会社経営として、例えば 10 名の中で 1 が抜けるというのは結構大きな損失かなと思っています。その 1 が抜けた穴をどうやって埋めるかというのに会社は苦慮するわけで、そこを埋めても、抜けても穴が出ないようにと考えると、与えられるポジションというのが限定化してくるというのが中小企業の課題かなと思っていました。なので、そういったところに対してアプローチをしていかないと 20 代後半とか、多様な働き方を認めるということ自体の入り口は多分形成し切れているのですけれども、認めた後に働き続けてもらう体制をつくれていないというのが今の県内企業の現状なのではないかなと思っています。なので、20 代後半以降が出ていくのはそういった背景もあるのではないかなと、いろんな企業様と関わりながらお話をする中で感じたところの私の意見です。

○牛崎志緒部会長　そうなのですよね、本当にそこは私も同感です。本当に物理的にトイレ一つとっても、女性用のトイレがなくて、今建設業の中でも女性用のトイレをいろんな県の補助を使って整備していらっしゃったりとか、本当にそんなところから、あとは何よりも今はＡＩがこのぐらい当たり前になっている中で、いろんな生産性の高め方ってある

のですけれども、そこが一つ体制づくりの中でフィットされていないというところが、なかなかそこが長く働く上での環境に整合性が取れていない状況というのはすごく感じますね。山影さんありがとうございます。いい示唆をいただきました。

残り少し、僅かになってきましたので、最後に皆さんから今思っていらっしゃること、一言ずつ伺いながら終わりにしていこうかなと思いますけれども、いかがでしょうか。いいですか、ありがとうございます。

それでは、西條さんからまた順番にお伺いしていこうかな、どうでしょうか。

○西條匡杜委員　ありがとうございます。西條です。まずは、さっきの話の続きで話し出せなかったのですけれども、首都圏と暮らしやすさの違いという話でさっき盛り上がっていたのですけれども、私は大学でそういうインフラの話をいっぱい学んできたので、個人的に思うことと、あとこれは父から聞いた話なのですけれども、車が使えなくなったときに、首都圏は何でもあるから、徒歩圏で何でも済ませてしまうから、やっぱり便利だという話をしていたのです、年を取ると。

父が一時期東京都内に単身赴任していたのですけれども、やっぱり足がなくても自分の足さえついていれば何とかできるみたいなことを言っていたので、そのインフラ部分の充実さというのは、ずっと同じところに住んでいたらその違いは多分感じないと思うのですけれども、一回それがすごく便利なところに出てしまうと、「ああ」となってしまう人が多いなと思うのです。

その一方で、地方だと、どこだっけな、富山かどこかが市営バスを廃止してしまったみたいな話を聞いたことがあって、まちのインフラというのがどんどん、どんどんちょっとずつ支え切れなくなってきているというか、人のニーズを支え切れなくなってきた結果、ちょっとまずいかもしれないみたいになって出ていってしまう人も多いのではないかと、個人的にさっきの話をお聞きして思いまして、それってすぐにどうにかできる話ではないなというのも学んでいるので、分かっているのですよね。それを踏まえた上で、住みやすさという中では、車が要らない社会だったりとか、コンパクトなまちづくりというのも大事になってくるのかな。

全然違う切り口で最後に話してしまったのですけれども、さっきの話を聞いていて、私は思いました。最後に話したかったことは以上ございます。失礼します。

○牛崎志緒部会長　ありがとうございます。広い県土を持つ岩手県にとっては、西條さんのインフラの話は必ずついて回る話です。ありがとうございます。

西條さんの次は、佐藤さんです。

○佐藤柊平副部会長　今日の話をいろいろ聞いていった中で、最終的にはこれは県の総合計画の中での若者・女性部会ということですけれども、結局民間がどれだけ変われるか、頑張れるか問題になってくる部分というのが結構あるなと思っています。やっぱり一つ一つの職場とか、組織ですよね、行政だけが旗を振っても、民間がついてこなかったり、そこへの広がりがどうしても欠いてしまうと、やはり今議論されているようなある種理想的な部分へのベクトルというのはどうしても弱くなって分散してしまうのかなと思っていて、

私も一民間側の人間としては、やはり民間側がどう変われるかとか、対応していくか、そういった部分が、そういったところをどう県の施策として後押しできるか、するかみたいな部分が今後の総合計画の中ではすごく重要になるのではないかなと思います。

なので、結局は給与水準だとか、職場環境とか、価値観みたいなところを一社一社が変容していくにはどうしたらいいかということを言っていますけれども、すごく難しい部分ですが、今日の議論を基に、私自身は自分の会社でそこをどれだけ実践できるかにチャレンジしたいと思いますし、マルチステージみたいな言い方したりしますけれども、今後の少しキーワードとして、そういった生き方とか働き方を、要はいいんだと許容していくような、あと許容したとしても会社も困らずに、割と前向きにそれを選択できるための産業側、民間側が動きをどうつくるかは、そこはぜひ盛り込んでいくべきような内容になる部分なのかなと思いました。

以上になります。

○牛崎志緒部会長　ありがとうございます。本当に民間でもどう頑張ったらいいんだろうねというのはちょっと別で話したい感じもします。ありがとうございます。

では、山影さんお願いします。

○山影峻矢委員　実際結果、戻ってきてもらったり、関わってくれている方々が最終的にどこに帰着するかというと、やっぱり企業との連携というところにつながってくると思うので、多様性を受け入れる入り口を広げていくという観点はとても重要かなと思っているのですが、その一方で受け入れた後、どう対応できるのかという継続的な、維持的な部分に着目していくのが今後なのかなとちょっと思っております。

吉田さんですとか、西條さんみたいな、こういった魅力的な方々がこういった部会に参画していただいているというのも岩手県の魅力の一つであるのではないかなと思っていますし、お二人にプレッシャーになってしまうかもしれないですけれども、こういった方々が継続的に関わってくれるにはどうしたらいいのかみたいな、こういったところを行政だけではなくて民間と連携しつつつくっていく体制をつくって、制度をつくっていく。それが行政主導であるべきものもあると思うし、一方で民間が主導でやっていかなければいけない部分というのがあると思うので、そういったところの線引きをちゃんとして、行政としてこれは民間でやってくださいですとか、これは行政でやりますのでという旗振りみたいな、それが総計審だと思うのですけれども、そういったところを線引きしていただくというのがまず一つなのかなと感じたところです。

まとまりがなくなったのですけれども、私も関係人口の増加みたいな事業をやっている中で、そういった方々を新たにつくるとかは難しいなと思っている部分がある中で、岩手の魅力というのは魅力的な企業、行政がそろっていますというところに打ち出せるように私自身も精進していかなければいけないなと思っていますので、すみません、最後だらだらとしてしまいましたが、そんな私の最後の話です。ありがとうございます。

○牛崎志緒部会長　ありがとうございます。いい流れを今日はつくっていただきました。ありがとうございます。

では、山屋さんお願いします。

○山屋理恵委員　本当に私もたくさん勉強になります。ありがとうございます。私は困った相談とか、困ったことをたくさん県民の皆さんから聞いていて、やっぱり希望を持ちたい、ここで生きていきたいという声をたくさん聞いていることをお話しさせてもらっていますが、やはり県民計画に反映させるにはぜひ県庁の皆さんが、県が旗振り役、ここで希望を持てるのだよと、持って生きていけるのだよという旗振り役としてぜひ言い切ってほしいです。

知事がジェンダー平等をスタンダードにするのだったら、それを前面に出していくことが「未来を削らないということである」とか、ビジョンがぼんやりしていると、結局何を変えればいいの、何なのということになるので、ぜひ大きなスローガンをつくって、「一人一人を大事にしている」ということを経済の面だけではなくて、意識改革もぜひ表に出していってほしい。外から呼び込むのもそうですけれども、今ここで生きている人たち、子供の貧困もそうですけれども、未来の子供だけではなくて、今いる子供たちのために何ができるかというような形で示すこと、そして、若者・女性推進室があります、県には。そこにちゃんともっと権限と予算を持たせて、こういった取組を強化していく。ぜひそういったところを力入れていく県であってほしいなとも思います。

ありがとうございました。

○牛崎志緒部会長　ありがとうございます。本当に今日も皆様に助けていただきました。すごくいいキーワード出てきたと思っています。論ずる上で、人、組織、地域のところの関わりをしっかり背景に持ちながら、考えなければいけないなというところであったり、あとは社会関係資本の拡大もそうだったと思って、私はもう一回本を読み直そうと思いました、ありがとうございます。

あと、非経済的関わりから経済的関わりといったところのまとめ方も含めていろんなキーワードを頂戴しました。何しろ今日の委員の皆様、本当に吉田モデル、西條モデル、山屋モデル、佐藤モデルで、それこそ山影さん、御出身どこだったかなんて分からないけれども、いろんな皆さんそれぞれの背景でもってこのぐらい岩手に貢献してくださっている人がいるというところですね、本当に改めてありがたいなと思いながら、私も伺わせでいただきました。

それでは、第４回目が最後ということになります、６月 18 日でしょうか、またお目にかかりたいなと思います。

吉田さん、飛ばしていました、ごめんなさい。お願いします。

○吉田知世委員　ありがとうございます。生きやすさのところにちょっと戻って、私も生きやすさのところでちょっと発言したいなと思ったところがあったのですけれども、私がＵターン限定になってしまうので、偏りのある意見だということは承知いただきたいのですけれども、私の生きやすさとして東京を選んだ理由は、多分お仕事というところ限定でして、だけれども私とか上京した高校の同級生で一緒のタイミングで上京した子たちと御飯とかに行くと、子育てをするなら岩手の方が安心だよねみたいな、自分が育ってきた環

境で生活するイメージもできるような、やっぱりそういうところというのは岩手だといいよねという話が自然と最近だと出るようになってきていて、それは具体的には仕事をどうするとか、おうちどうする、結婚どうする、車どうするということは、一回詳細を考えなければ岩手がいいなという気持ちというか、マインドというのは結構みんな持っているものなのだなということを一応お伝えしておきたいなと思いまして、なので今私たちが選択している生きやすさは東京なのかもしれないですけれども、ライフステージによっては岩手の方が生きやすいと思うとき、思っている人というのはいるのだなということをお伝えしておきたかったです。

あとは、岩手のいいところ、この間、みんなで友達とかと帰るときにぽっと出たのが、ここに行けば必ずこれがあるみたいなのが分かるのが岩手だねみたいな、ここに行きたい、ここにと。選択肢が少ないからこそ、ここに行けば全てが済む。東京はあり過ぎて疲れてしまうというのがあって、岩手なりにいいところがもちろんたくさんあるので、そこをもっとＰＲしていく、打ち出していくというだけでも移住定住だったり関係していくというところに１個プラスになるかなというのを感じておりますという話でした。

すみません、最後に。ありがとうございました。

○牛崎志緒部会長　いいまとめしていただきました。ありがとうございました。

では、事務局にお返しいたします。

○菊池政策企画課特命参事兼政策課長　皆様ありがとうございました。また、部会長、進行ありがとうございました。

３　その他

○菊池政策企画課特命参事兼政策課長　次第の３でございます、その他、何か皆様からございますでしょうか。よろしいですか。

（なし）

○菊池政策企画課特命参事兼政策課長　ありがとうございます。

それでは、次回でございますが、６月 18 日に第４回目を予定しております。次回につきましては、これまでの議論を踏まえながら取りまとめという段階に入ってまいります。引き続きよろしくお願いいたします。

４　閉会

○菊池政策企画課特命参事兼政策課長　それでは、本日はこれで終了させていただきます。ありがとうございました。